特集・アジアの都市と横浜④

アジアの都市の現状

①バンコク・クロントイ・スラム――私のボランティア活動――岩崎美佐子
②都市住居（スクォッター・スラム）と居住政策――岡　利実
③アジア都市の交通問題――太田勝利
④第三世界における都市のはざまで――飯島　茂

①バンコク・クロントイ・スラム

私のボランティア活動

岩崎美佐子

一――バンコクのスラム
二――JVCでボランティア活動
三――クロントイ・スラムに入る
四――図書館建設に着手
五――スラムの人びと
六――完成した図書館

一――バンコクのスラム

私の住んでいるバンコク市内にはスラム地域が二〇〇以上あるという。タイ住宅公団では、一般にスラムと呼ばれている不良住宅街の調査をするため、市内の航空写真をもとに不良住宅と思われる住戸が六〇戸以上のまとまりをみせている地域をスラムと仮定してその総戸数を数え、それに一戸当りの平均人員を掛けてスラム人口の総数を推計したところ、ちょうどバンコク市人口の一五%という数字を得た。このことから実際は、六〇戸以下のまとまりしかない住戸や拾い落しの住戸等を加えると、スラム住居人口は約二〇%、即ち一〇〇万人前後であろうとの判定を下した。このような写真からの推計によるのも、住民台帳を基礎とする統計がいまだ十分に確立していないためであるが、私の実感としてもこの数字は決して過大なものではないと思う。バンコクでは冬でも摂氏二〇度を下ることはなくいつも暑いか暖かいので、壁が少々はがれていようが床に隙間があいてようが、さして困らない。私の家族は最近引越したが、それまで住んでいた家の奥もスラムであった。このスラムは我家と出入りの路地を共有しているため、朝な夕な子供達の遊び声や物売りの行商人達が我家の門前をにぎわしていた。スラムは一般に出身地別に構成されている例が多いが、このスラムはタイ南部出身のイスラム教徒ばかり住んでいた。このスラムに限らず、ほとんどのスラムは水はけの悪い湿地帯に建てられている。家を建てるためにはまず水たまりのような湿地部分に木杭を打ち込む。土は驚くほどに柔かく、木杭に横木を渡し、その上に乗り飛び上って反動力を加えると、杭は見る間に沈んでゆく。この杭に柱をつなぎ、床棋等で沈下の均等性に気を配りながら、簡単な屋根小屋を組み、それに拾い集めた古材や古トタンで屋根、壁を被えば早いもので一日で家ができあがってしまう。便所は一般に土管を湿地帯にさし込み便座を付ければ、温度が高いためかバクテリアの繁殖力が強く、一種の自然浄化作用によってその便器を長年利用していてもさして臭気もなければ、汲み取らなくてもあふれはしない。線路沿い、工場の裏手、小さな路地の行き止りの所など、バンコク市内いたるところに大小のスラムを見ることができる。

バンコクは人口五〇〇万人の大きな都市である。公共交通機関としてはバンコク市経営のバスだけである。これに個人

営のソンテオ（二列の意、トラック改造のバス）、トゥグトゥグ（三輪・四輪軽自動車のタクシー）、日本の古自動車を利用したタクシー等が、幹線道路や小さな路地を所狭しとかけまわって、市民の足を確保している。これらの自動車は排ガス規制が不完全なため、マフラーをはずしたオートバイとともに一大騒音を奏で、歩道で人と話していても聞こえないほどである。街には全般的に活気があり、お金さえ出せば何でも手に入れることができる。

本稿では縁あって参加したJapanese Volunteer Center, Bangkok（JVC）のスラム・クロントイでの図書館建設の過程で経験した、さまざまなタイの素顔とその間見知ったスラムの人々の様子を記してみることにしたい。

二――JVCでボランティア活動

私達家族が来タイする少し前一九七九年の秋から始まったカンボジア難民のタイへの流出は年を越しても収まらず、世界の注目を集めていた。私達の住むバンコクからカンボジア国境まで約三〇〇km車にして四時間の距離であるが、一見安定したバンコクでの生活からは国境沿いの悲惨な事態は毎日の新聞でみるだけで、実感としてはなかなかとらえきれなかった。一九八〇年二月には、日本からやむにやまれぬ気持でかけつけたボランティアと在タイ主婦を中心として、難民救援活動を目的としたJVCが結成され、活動を始めた。最初は国境へ古着や食糧や医薬品を届けることから始め、その後キャンプが落着きをえるにつれて、子供達の教育援助や職業訓練、またキャンプの衛生状態の改善など、その活動の範囲を徐々に拡げていった。その活動資金は、難民を救援しようとする日本の善意ある団体や個人から続々と集まってきた。日本から来た若いボランティアは、ウボン、ノンカーイ、ソンクラー、カオイダン等のキャンプ、あるいはタイ・カンボジア国境線上の難民村で、現地に寝泊まりして積極的に活動している。しかし私のようにバンコクで家庭を持つ主婦にはJVCオフィスの事務整理や難民制作のハンディクラフト製品の販売、各国から寄せられる古着の整理や配布などが主な仕事であった。私はハンディクラフトの販売を経てJVCの機関誌の編集にたずさわっていたが、これらは難民に直接触れることの少ない間接的救援活動なので、直に触れたいという欲求を押えることができなかった。JVCの活動趣意書の中には難民救援活動と共に、恵まれないタイ人への救援活動もその活動内容の一つに記されており、何人かの若いボランティアが実際にクロントイ・スラムでの活動を開始していた。私もこれを手綱に徐々にタイの人々の生活に触れる機会を持てるようになった。

クロントイ・スラムはその居住人口数においてバンコク最大であり、三万五千人から四万人が住んでいるといわれる（住民の出入りを激しく、はっきした統計もない）。チャオプラヤ河岸に位置するバンコク港の荷役労働者のための仮小屋住居が拡大して現在に至ったと言われているが、実際に今でも港湾荷役の作業に従事し、生活の糧にしている住民が数多い。初めてこのスラムに行くとき、豊かな生活をエンジョイしている日本人主婦から、気をつけたほうがよい、暴漢に襲われる、誰か男の人について行ってもらったほうがよいとの忠告を受けたが、私はジーパンにTシャツという何げない普段着で、ソンテオから下り、若いボランティアが住んでいるというスラムの奥深く入って行った。

三――クロントイ・スラムに入る

クロントイ・スラムは他のスラムと同じように湿地帯に建てられているため、ほとんどの家もその間を縫う通路も、土にさした木杭に横板を渡した一種の桟橋の上にある。通路は一般に船荷の梱包に使った幅約一〇センチ、長さ一・二メートルのパレットと呼ばれている固い木でできており、補修が不完全なため、いたる所、落し穴状に抜けているので、足もとに気を付けて歩かなければならない。私が訪ねて行った日本人ボランティア達は、一九八〇年四月頃からすでに半年以上スラムに、ある家を借りて住んでおり、スラムのあちこちを案内してくれた。通路は碁盤目状に構成されており、幅一・二メートル、狭い所で三〇センチ幅しかなく、それを挟む家と家の距離は広い所で三メートル、狭い所で一メートルくらいである。各住戸の室内が通路から丸見えで、昼寝をしている人、食事する人、洗濯する人などをみることができる。いわば、私的空間と公的空間が混然一体となっているので、スラム全体が一つの家の中のように感じられる。雑貨商店があちこちにあり、また通路に張り出した屋根だけの簡易食堂が軒を並べている通路もある。入口の他は古いベニヤ板一枚、てっぺんに蝶番をつけて、鼠戸よろしく、つっかい棒をするのが唯一の開口部という家も少なくない。家の造りは総じて貧しいが、通路を塞いで眠る犬、遊び廻る子供達、行きかう行商人などで、クロントイ・スラムの中はいつもにぎやかで活気がある。

JVCのクロントイ・スラムでの主な

活動は自分で学校や保育所また託児所等を作り、スラムの子供達の教育に力を注いでいるプラティープさん（二九歳、数度来日講演したこともある）と協力しつつ通路補修工事や、学費の足りない子供への学費補助、職業訓練としての夜間の電気工養成訓練校の経営などである。JVCボランティア達は住民の生活の中にとけ込み、信頼関係を築きながら活動の輪を広げようとしている。私も学校の庭のぬかるみにコンクリートの床の遊び場を作るのに埋め込む竹筋を作ったり、訓練校の竹べいを作ったりして、徐々にクロントイ・スラムでのJVCの活動に馴染みながら、私のできる織物やパッチワークの技術を住民に教えて、彼等にとって割のいい内職にすることはできないかしらといろいろ計画を練ったりした。

四――図書館建設に着手

私達は週一回のミーティングを開いて、活動の反省、今後の計画等を話しあい、現在いちばんスラムの人達にとって必要なのは子供対象の図書館であるとの結論に達した。一九八二年二月、さいわい地域の青年クラブが港湾局から借受けていて現在空地のままになっている、縦横とも一五メートルぐらいの土地を同局がまた借すと申出てくれたので、建設にいよいよとりかかることになった。私達に予算計画書を作成してJVC事務局に提出した。資金については、難民及び難民同様の貧しいタイの子供達のために使ってほしいという神奈川県からの寄付金二、三〇〇万円のうち、約六〇万円の執行許可を得、前に建築の仕事をしていた私の夫に図面を書いてもらって、基礎のための穴掘りから始めることになった。クロントイの活動にたずさわるボランティアはそのとき、男性四人（うち一人は中国系シンガポール）、女性三人。皆、人を助けようとする善意と健康に恵まれていたが、建築の経験がないので、図面の読める私が建設工事に関しては総括責任を担当することになった。材料の買付け、カンナがけ、墨入れ、そして接合部のきざみと、仕事は順調に進んでいった。朝は早くから、日の暮れる夕方まで、バンコクの強烈に照りつける太陽のもとで、私達は黙々と仕事を続けた。

しかし建物の基礎づくりには大変苦労した。出来上った建物が湿地帯のため傾きやすいと判断し、地元の人の助言をうけて、まず八〇センチ四方、深さ一メートルの穴を掘り、ここに長さ三メールぐらいの生木杭を、加重のかかる基礎部分には五本、軽い所で三本打ち込んだ。穴を掘るそばから水が涌き出てきて仕事がやりにくい。直径約一〇センチの木杭は立てておいて男三人がぶらさがって力を入れると、杭はみるまに沈んでいく。木杭を打ち終えた穴にはコンクリートを打ち、地上部に出たところで先端を台形に整え、合計三〇本の基礎作りをした。材木のきざみにもたいへんな労力と時間を費した。私達は町で売っているきれいに製材された材木は高いので、バンコクから五〇キロぐらい離れた安い材木屋にわざわざ出かけ、土台、柱、梁等の材料を買い入れたが、この木がおそろしく固かった。床梁はボルト締め、屋根組みと床板等は釘打ちにしたが、ボルト用の穴あけもドリルの刃がすぐ傷むし、釘もすぐ曲ってしまい、思わぬ時間をとられてしまった。プラティープさんの呼びかけで住民も日曜日には手助けに来てくれたが、そのうち工事が複雑になってくると、言葉の不自由さから、手順よく手伝ってもらうことが難しくなり、つい自分達だけで作業した方が効率的になってしまう。スラムの人達といっしょに建てたほうがよいのはよく分るのだがなかなか難しい。

五――スラムの人びと

JVCのボランティアがタイに来て生活するようになるにはいろいろな動機がある。しかし皆一様にカンボジア難民と貧しいタイの人々の助けになればと、学業半ばで来る人もあれば、社会にでてそれなりの経験を積んで来ている人もいる。教師、看護婦、公務員の生活をなげうってやって来る。老人ホームや養護施設等で働いていた人も多く、青年海外協力隊で他の国へ行っていた人もいる。皆よく働き楽しく生活している。しかし彼らに共通の悩みは、激しい労働の割に、決まりきった栄養不充分な露店での毎日の食事である。クロントイのあるボランティアはそのため月三千円で、ある家庭に夕食を寄食させてもらうことにした。この家庭は夫が第六区小学校の雑役、妻が小学校の給食係をやっている。彼等は学校の壁無し多目的教室のすぐ隣の給食室兼住宅に住んでいるが、図書館建設中、材木を盗まれないよう預ってくれ、また材木のきざみを炎天下でやらなくてもいいよう、軒つきの中座と壁無し多目的教室で作業をやっても良いと申出てくれた。この家庭は夫中国人、妻タイ人、二人とも三十代後半でとても人が良い。娘が二人おりそれに夫の妹夫婦とその息子二人、さらに同居人二人を入れて合計一〇人が住んでいる。給食係の妻は毎日たくさんの御飯を炊く。そのため暇があればその日炊くお米の中からもち米を取り除いている。どうしてかと尋ねたところ、もち米は嫌いなのだが、うるち米だ

けのお米を買うと高いので混ざっているものを買い、後で選分けているとのことであった。東北タイ出身の人や山岳民族の人はもち米を好んで食べるが、中部、南部出身のタイ人はもち米が嫌いなうえ、貧しい食物という考え方を持っている。一一歳と一三歳になる娘達も学校から帰るとお皿洗い、掃除とかいがいしく働く。同居している夫の妹は給食室の片隅で美容院をやっている。クロントイ・スラムも他のスラムもほとんどの家庭が電気と水の供給を受けているが、水圧が低く吸上げポンプもないので地上三〇センチぐらいの高さまでしか水をあげることができない。この美容室でも洗髪はバケツに汲んだ水で手桶でする。パーマ三〇〇円、散髪一〇〇円、マニュキア、ペデュキア両方で一〇〇円といった値段である。スラム内は湿地で、住民はだいたいゴムゾウリなので足も汚れ易いと思うのだが、けっこうペデュキアも繁昌している。妹のつれあいは自動車車体の修理屋である。作業場は学校の横というよりはむしろ校庭の一角で、鉄板、バーナー、あて金用鉄板の切れ端、金槌等、わずかな材料と工具で、錆びてボロボロになったトラックを解体修理し、二週間もあれば、新車と見まごうほどきれいにしてしまう。

長期にわたって住みついているボランティアは不精して、洗濯を近所に住む女性に頼んでいる。ズボンから下着まで一切洗ってくれて月千円である。この洗濯をしてくれる女性の家族は小学校の給食係の夫婦に比べると貧しく、夫は港湾荷役の仕事をしている。家に電気を引くお金が無いのか、近所の家のコンセントから長々とコードを引き、月四百円で貰い電気をしている。八歳の女の子を頭に三人育てているが、親と似ているのは長女だけだと思っていたら、あとの二人は知人の子供だという。真中の白人との混血の女の子はその後、その子の祖父母に引取られていった。下の男の子はまるまる太って可愛らしく私達にもよくなついていたが、この子の父親は日本人で今は帰国してしまっており、母親は麻薬で刑務所に入っているという。自分達がやっと食べている状態で人の子供を預かるということは、日本では考えられないことだが、やっているタイ人は気にも留めず、あたりまえといった顔をしている。ボランティアみんなが「おばちゃん」と呼んで親しんでいるこの女性は三〇歳くらいか、美人でいつも明るく、時にアルコールが入ると底抜けに陽気になる。

この他図書館建設現場の隣りに住んでいる芝居屋さん（旅芸をなりわいとする家族で、いつも大勢出入りしており、民族楽器の練習の音が聞えてくる）、プラティープさんの所で働く若い人達、時々おかゆを御馳走してくれる近所のおばさん、学校が終れば手伝いに来る男の子、足場の悪い所をスルスル登り、難しい細工をしてくれた本職の大工さん等、皆陽気で人が良く、その上礼儀正しくて、つきあっているととてもさわやかになる。

六――完成した図書館

図書館建設は基礎工事の難しさ、予期しなかった材木の固さや雨期の到来で、予定より延びていったが、それでも着々と進んでいった。途中活動をするボランティアの中には学業を続けるため帰国するもの、新たに来るものと多少の変動はあったものの、災天下作業は続いた。

建設中気になったのは、金槌、鋸、材木、釘等、物がよくなくなることである。子供達がいつも建設現場をうろうろしており、ちょっとのスキをついて持って行ってしまう。床を張った後は、工具を床の端まで引いて行き、一人が床のすき間から落して、一人がすばやく自参した袋に入れるといった巧妙な手口を使っている子もいた。昼休みでも現場を離れる時は、道具、材料一切を隣の芝居屋さんの家の中に運び込まなければならない。材木の切端は切っているそばから子供達がどんどん拾い集めて家庭燃料の足しにしている。高価なものが無くなったりするとガッカリするが、また気を取り直して仕事を始める。

一九八一年二月から始めて八月までの七ヵ月間をかけて、図書館はようやく完成した。屋根は室内の温度を下げるためタイ式のとんがり屋根で、遠くから眺めると大変だった基礎作りからよくそこまでと、安堵の溜息が出る。私も連日の戸外作業で真黒に日焼けしてしまった。

一九八一年九月五日、仕事に協力してくれた近所の人達やプラティープさん、JVCメンバー達、それにお坊さん七人を呼んで開所祝いをした。読経の後、たくさんの料理を囲んでいくつもの車座を作り、七ヵ月の苦労をねぎらった。タイ人を組織して彼等自らが建設するというふうにはいかなかったけれど、それでもこの図書館はクロントイ・スラムの人達に何らかの貢献をするに違いない。

最初は緊張して入っていったクロントイ・スラムも、エネルギーに満ちた街であった。人々は気さくで人が良く、他人の家、自分の家というよそよそしさもなく、一つの大きな家族のようだ。物質的豊さを得ることによって、人の息づかいが消えてしまった街よりも、人の子供も黙って預って育てるほどの気概を持ち、貧しいながらも互に助けあおうとする気運にみちたスラムに、私は魅せられてしまった。

〈JVCボランティア〉